

日本文理大工学部
建築学科助教

江越充さん(37)

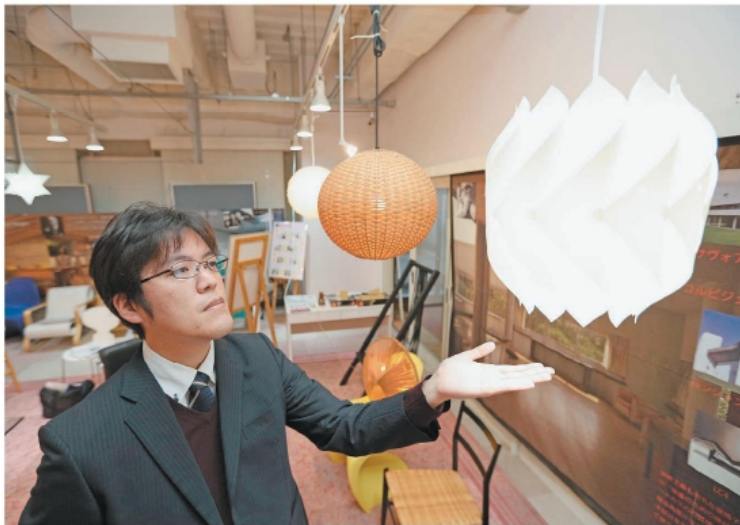


光は人の感情に大きく作用する。明るい照明の下では気持ちが高ぶり、あらゆる感覚が強く働くとされる。かつて住宅は一部屋に一つ電灯を設置する「一室一灯」を基本とした。最近では複数の光源を備えた「二室多灯」の部屋も好まれる。リラックス効果やストレスの軽減など、住空間の光環境の変化が人にとどのような影響を与えるのかを研究する。

ポイント「光の重心」。明かりの配置を決める照明デザインの現場で使われる用語で、光がどこに分布しているのかを指す。例えば床に集中している状態を「光の重心が低い」、逆に天井付近であれば「重心が高い」と表現する。「業界には重心が低いと落ち着き、高いと緊張感をもたらすといった一般論がある。ただ裏付けはできていない」。まずは数値化して、相関性を分析するつもりだ。

◆ ◆ ◆
東京都府中市出身。名古屋工業大で建築学を学び、照明の重要性に気付かされた。「光が変われば、空間の印象もがらりと変わる。とても面白く、追究したいと強く思った」
同大大学院を修了後は、都内で照明メーカーや照明デザイン事務所勤務。住宅や商業施設、スタジアムなど数々の施設で照明器具のレイアウトを提案した。2018年に開館した竹田市総合文化ホール(グラン

光環境の変化 人にどう影響



住空間の照明デザインについて研究する江越充助教。大分市の日本文理大、撮影・江藤成吉

ツけた)にも携わった。あらゆる現場を巡り、生じたのは「住宅照明を変えたい」との思い。「個人客で関わるのは、別荘など主に裕福な人だった。一般家庭にも照明デザインの良さを知ってもらいたいと強く感じた」。研究成果という形で理解が広まることを目指し、20年に日本文理大の教員に転身した。

地域課題の解決にも活用

◆ ◆ ◆
研究室では光を活用した地域課題の解決にも取り組む。

「アンケート調査で、安心感が増したとの回答が全体の約9割を占めた。住民に光の大切さについて考えてもらうきっかけになったのではないか」。商店街から好評で、今月18日にも実施する予定。

宇宙空間における最適な光環境についても興味のあるテーマ。オリジナリティを重視する。

「前職の経験を生かし、新しい分野を切り開く。社会実装できる成果を生み出したい」(菅嶋悠)

＝ 随時掲載 ＝

エッセイ・ミステリー 1000年、東京都生まれ。名古屋工業大大学院工学研究科(修士課程)修了。工学修士。照明メーカー、照明デザイン事務所を経て、2020年4月から現職。大分市在住。